
Eternal Love

朧月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

* E t e r n a l L o v e *

【Nコード】

N 7 8 0 7 E

【作者名】

朧月

【あらすじ】

始まりはきつと、とても些細な一つ一つだったんだ。それを積み重ねて、今ここに二人は存在している。ゴールはすぐそこだ。けど、それは「おしまい」じゃなく「始まり」。さあ、一歩足を踏み出した先にある幸せを手にいれよう。これは、とても奥手で不器用な二人の、愛と友情のお話。

前編。

ピンポン……

米花町にたたずむ洋館の門の前に、一人帽子を被った男が立っていた。ご機嫌宜しい様子のその男は、ひたすらその家の主が戸を開けるのをただ待った。

太陽が照って暑い中、だれ気味な様子でインターホンを受け答えた家の主とは正反対に、そこで待つ彼は元気に生き生きとした顔を浮かべていた。

「くどーっ！」

戸を開けるなり腕を広げて飛びついて来た来客に顔をしかめた新一は、自分の体全体を駆使して必死で抵抗した。性根が人懐こいせいか、普段から幾分過剰に感じるスキンシップを取る彼は、その日いつもより数倍のテンションで顔一杯に満面の笑みを浮かべていた。

「ちょ、いい加減離せよばーろ！」

自分よりも力のある相手の手を強引に振りほどく。すると、目の前にいる色黒の彼はふっとおかしそくに笑った。

「せやな、スマンスマン。小っさい工藤の頃の間が、まだ抜けてへんねん」

「……気色わりーな。ったく」

「そう言うなや。オレかて、同じ年の男に抱きつく趣味なんかあら

へんけど。何やるなあ……オレは小さい工藤の方が付き合い長し、態度とか突然どう変えてええのか今一よー判らへんねん」

不機嫌にジト目で呟いた新一に、彼は苦笑いを浮かべつ肩をすくめた。

彼とて”江戸川コナン”という存在を子供と意識してみた事などないであろう。それでも、子供の外見だからこそ、まるで弟のようにスキンシップをしていた習慣は、急に直るものでもない。逆に無理して直せば、妙なぎこちなさすらも産まれてしまうだろう。

「まだ慣れてないんやろな、オレ。お前見てるとお前とちゃうみたいで緊張するわ」

「……よく言うぜ今更。ま、いや。あがれよ、服部」

元の体を手に入れて、まだほんのひと月。完全な帰還を果たしてから、彼が平次に会ったのはまだ二度目だ。江戸川コナンの姿で会って、江戸川コナンの姿で親しくなった彼に突然態度を改めるというのも酷な話だ。

それに、今回こうして彼が大阪からわざわざ尋ねてくれたのは、新一が彼を呼んだからだ。こんなに、彼が上機嫌で居るのも、友人として本当に祝福してくれている証拠なのだ。

緊張すると言いながらも、部屋へと案内する隣で嬉しげに語る平次の姿に、感謝を覚える。

「なあ……ところでお前、彼女は？」

てつきりポニーテール姿が特徴の彼女が、後ろからひょっこりと現れると思っていた。しかし、その姿が見えない事に首を傾げた新一に、平次は一瞬目を丸くして、答えた。

「……彼女で、和葉の事か？ 姉ちゃんどこ行つとるで。一緒に合流するんでもよかったんやろうけど、積もる話もあるやろってなあ」「そつか……そうだよな、今頃彼女も蘭と二人できやーきやー喜んでるのかも」

「電話受けた時もめっちゃ興奮しとったからなあ、アイツ」

自分達以上にはしゃぐ彼女達の姿が容易に想像できて、二人は顔を見合わせ、笑った。

部屋の戸を開けるなり、遠慮なく部屋の中央に座った平次に、新一は缶コーヒを放つ。プルタブが持ち上げられる音が二つ、部屋に響いた。

「じゃあ蘭と彼女が来るまで、適当にくつろいでればいいだろ」

「あ！ それやったらオレ気になつとった事件があんねん、お前がこないだ解決したつちゅー奴なんやけど、テレビで偶然見とって……」

適当にくつろぐとすると、二人の間で事件の話が出るのは必須だった。早速嬉しそうに話を切り出した平次に、新一はあごに手を持っていく。

「こないだって言うと、あれか？ 杯戸シティホテルで起きた事件」「せやせや！ お前が解いたんやろ？ 大阪こっちじゃ詳しい説明してくれへんかってん。まーた随分けつたいな謎だらけやったそうやないか」

「まあな」

「結局どないな事件やったんや？」

聞かれた新一は、ほんの一週間と少し前に杯戸シティホテルで自分が解決した事件を思い起こした。

後味は悪くない事件で、ただただ随分と難解を極めた謎に、珍しく翻弄されていた。しばらくは、そんな他愛ない話で時間を過ごし、窓の外に蘭と和葉の姿が見えるなり、新一は立ち上がり、平次を背にして部屋の戸を開けた。彼はふっと口元を緩め、ドアノブを握る手を止める。

「……服部、二人きりのうちに言っとくけど。ありがとな？ 引き受けてくれて」

呟き、振り向いた新一の穏やかな笑みを、平次は目を丸くして見つめていた。

「……なんや、変な気分やな。お前からそないな台詞聞くつちゅうんは」

「あんだと？ 人がせつかく素直に礼言ってやってるっつーのに」

文句を言いかけた新一だが、台詞に続くように響いたチャイムの音に遮られ、それきり何も言わぬまま階段を下りて玄関へと迎えに行った。

数秒後、部屋に残された平次は、突然賑やかになった玄関先の声をただ聞きながら、大阪にかかって来た電話を頭の中で思い返していた。

電話から届いた新一の声を、もう一度だけ自分の脳裏に反復させ、部屋の隅に置かれた写真たてに視線を送る。幸せそうに写る二人の姿に、彼は静かに目を閉じ、口端をゆっくり持ち上げた。

「まさか、工藤がなあ」

呟いた平次は、窓から外に視線を移した。彼の目には、晴れ渡る
天気とその幸せな日を祝福しているようにも映った。

丁度、工藤家に平次が着いたのより少しだけ前の頃だ。

蘭は、アルバムを取り出してきて暇つぶしに眺めながら、先ほど
東京駅にいと連絡があつた和葉の到着を待っていた。

まだ幼い頃のアルバムには、思い出がたくさん詰まっている。一
枚一枚とめくるごとに、段々その光景が頭に浮かんだ。

思えば、子供の頃からずっと、自分は新一といつも一緒に居た。
写真の中に写る自分の隣には、殆ど彼の姿も写っている。屈託なく
笑い、泥だらけになる自分達……思い起こせば、今でもまだ頭には
鮮明な記憶がよみがえる。

何よりもきらきらと輝いた、幸せな記憶だ。

「懐かしいなあ……私たちって、本当にいつも一緒だったね。新一」
ふつと幸せで懐かしさの籠る笑みが顔いっぱいには浮かんだ。緩ま
った顔面の筋肉を、引き締めようとせずつになるがままに目を細め、
頬を染める。

いつもいつでも、一緒だった。まだ、自分が彼を”そういう対象

”として認識するよりも前から。物心ついた時には、既に見える景色の中に彼が居た。

「らん、早く来いよ」

「待ってよ、しんいちいつ」

ほぼ崖というに近い急角度の斜面を、彼の後姿が楽しそうにすいすい登っていく。ロッククライミングのように、岩から岩へと、手足を伸ばしながら。その後を、必死で追いかけた自分が居た。ほぼ体の大きさは自分と同じ筈なのに、あの小さな背中が次の岩に向けてぐいっと伸びることに、少し大きく見える。

「ほら、もうてっぺんまで来ちまったじゃねーか」

既に頂上に到着した新一は、満面の笑みを浮かべて再び蘭を呼んだ。

思えばいつも幼い頃から探険と称しそんな小さな体に不似合いな動きばかりさせられていた。それがもしかすると、今の運動神経につながったのかも知れないと思うと、彼にも感謝しなければいけないけれど。

袖に顔をこすり付けるように、額から出てきた汗を拭う。そして、きつと真上を睨んだ彼女は叫んだ。

「もーっ、ひとりでどんどんおいてかないでよ」

「二人で登ったら逆に危険だろ？　ついてくつったのはおまえじゃねーか」

上から呼びかける新一の言葉に、蘭はむっと顔を膨らませる。

「だーって、しんいちが突然式場まで見に行こうなんていいだすんだもん！」

「父さんが呼ばれる事件だぞ！　ぜってー勉強になると思ったんだからな」

「もー。推理ばかほろくな大人にならないっておとーさん言ったよ？」

「よく言うよ。おめーのとうさんだって刑事さんじゃねーか」

むつつり頬を膨らませる蘭に、彼はイタズラめいた笑みを浮かべた。

「オレは、将来”たんてい”になって、ホームズもびつくりのかわかい大人になんだから、もうちよつとそんけーしろよ」

「でもしんいちやしんいちだもん」

言いながら、ようやく頂上に手を伸ばす。すると、突然目前に手の平が差し出された。きょとんと見上げると、少し膝を曲げた新一が大人っぽく微笑した。

「ほら、つかまれよ。ひきあげてやつから！」

「う、うん」

自覚はないけど、たまにする彼のそんな態度には、その頃から胸を熱くしたりもした。

散々文句を言って登ったけれど、いざたどり着いてみると、自然

と無邪気な気持ちになつて、顔いっぱい笑顔を見せて「ありがとう」を言ってみたり。そんな、幸せな空間が当たり前のように隣にあったのだ。

「ねえしんいち。どこ？ その教会」

「ああ、そこだよ。父さんの言つてた教会！ 表からじゃ刑事さんにじゃまされて入れないから、こんなたいへんな所から来たんだけど」

「うん、お父さんたちが入れてくれるわけないもんね」

二人で、手を繋いで小走りで教会に向かった。近くの木に二人で登つて、そこから中を覗く。優作や小五郎、目暮、そして新郎新婦などが中で談笑していた。

「なーんだ？ ずいぶん楽しそうじゃねーか」

「ねえ、しんいち。どんな事件がおこつたの？」

「さ、さあ」

眉を寄せて、首を傾げた彼を横目で見つめる。考え込むようにあごを手に乗せて、じつと教会の中を覗く彼の横顔に、暫く見とれていた。

「うーん……たまにまじめな顔で話してるんだけどな」

「そうかなあ？ んー、こっからじゃよくわかんないね」

「た、確かにな」

少しむくれ顔で、彼は眩きをもらした。教会のすぐ傍には、子供が登れるような木がなかった。その為、十メートルほど離れた木に登った、はいいのだが、角度的に窓から全てが見えないようだ。

「ねえ、やつぱりむりだよ。お話ししてる声もきこえないよ?」

「あー、くそつ。そういや、のぞこうとしてもムダって言ってたよな」父さん

「え? そうなの?」

顔をしかめて、頭をかきむしる彼に聞き返す。彼は苦虫を噛み潰したような顔で、窓を見たまま言った。

「ああ、今日は大事な人によばれたから、絶対はずせないんだって言ってたよ。でも新郎さんが子供ぎらいらしくって、今日だけはつれていけないよって」

「ふうん、じゃあけつきよくここで眺めてるだけなんだ」

「う……まあ、そうするしかねーのかな?」

新一は小さく吸い込んだ息を、大仰に吐き出した。よほど悔しかったのか、頭を項垂れた彼の口はとがっている。そんな彼の様子に、微笑み一つ。

「でも、いいなあ……あの花嫁さん」

「え?」

「私も、いつかあんな風にふわふわのドレス着るのかなあ」

綺麗にウエディングドレスを着飾って、顔を一層栄えさせる化粧をつけた花嫁の笑顔に、心が躍った。そして、その花嫁の肩を抱く新郎の姿にも。

見とれながら、ふつと横をちら見する。隣に居た彼は、何故か教会の方ではなく、蘭をじつと見つめていた。微かに口を開け、頬を染めながら。

「あれ? どうしたの、顔赤いよ、しんいち?」

「そ、そのっ……じゃあ、オレが……おれ、がその」

急に、挙動不審にしどろもどろと、不規則な手の動きを見せる新一に、首をかしげる。声まで裏返るほどの同様ぶりは、彼には珍しい。

「おれが、どうするの？」

「だ、だから、おれが……っ、お前に、ふわふわの……」

聞き返すと、彼は更に視線を左右に動かしていた。その意味がわからず、真っ赤になった彼に、体を寄せた。

「ねえ、どうしたのしんいち？　はつきり言ってくれなきゃわかんないよ」

「ば、ばかつ。こんな細い枝にこんなにくっついてまたがったら！」

「え？」

慌てて離れようとした新一を追いかけようとした途端、股の下から枝がなる音が聞こえた。そして、一気に体が急落する感覚。目に映る景色が縦にぶれて、思わず鼓動が跳ね上がり、短い悲鳴を上げた。

「らん！」

耳に届いた悲鳴と共に、暖かい感触が体を包んだ。直後に、どすつとした振動が体に響いたが、どこも痛くなかった。その後と言ったら……。

ぶっ……、と堪えきれずに吹き出し、先ほどまで見ていたアルバムに顔をつ伏した。一通り笑い転げた後で、彼女は目にたまった涙を拭いながら、空いている手でアルバムを静かに閉じる。

「懐かしいね、ホント。自覚したのはずっと後だけど、多分私あの頃から、それよりもっと前からずっと、新一の事が……」

そつと目を閉じる。胸の中、頭の中に、次々と浮かんでくる。彼との、彼と過ごした大切な日々の思い出が。笑いあった日々も、泣いたり、励まされたりした日々も。そして、彼が居なくなっていた、あのとても長く感じた悲しい日々も。自然と、過去の記憶に引きずられ、口元には緩やかな曲線が浮かんだ。

「大好きだよ、新一」

小さな呟きと共に、彼女の頬はほのかなピンクを映した。もう少しでと思うと、鼓動が数回か早まった。

閉じたアルバムを両手で抱き込むように握り締めた彼女は、ゆっくりを時計を見上げた。一步一步時計の針が刻み進まれていくのを眺めながら、蘭は再び目を細め、微笑した。

玄関から鳴り響いたチャイムの音に、彼女はすぐに立ち上がった。小走りでドアの前までゆき、少し大きめの声で応答する。

「蘭ちゃん、アタシや！ お待たせ！」

「和葉ちゃん！」

勢いよく戸を開けた蘭に、和葉は破顔し飛びついた。

「おめでとう、蘭ちゃん！ ホンマに……連絡もろた時めっちゃ嬉しかったよ！」

抱きしめる力の強さから、和葉の気持ち伝わる。急に抱きつかれて一瞬戸惑った蘭もまた、負けない位の力で和葉を抱きしめ返した。

「ありがとう、和葉ちゃん」

幸せいっぱい抱きしめあう女二人の斜め後ろで、時計の針は、刻々と時間を刻んだ。とまる事なく、その訪れる幸せもまた、少しずつ彼女達の元へ近づいていた。

前編。(後書き)

新蘭ラブ計画ぐだぐだ前後編ものの、前編です！
皆様こんにちは！v v

さて。(こほんっ

……えーと、ねえ(^^;)

つくづく、どれだけこういう甘いお話苦手なんだよっていう、私の性質がしっかり伝わる出来んじゃないかと(；^|^A アセアセ……

シリアスから甘くなるならいいんだけど、最初から最後まで幸せいっぱいのお話というのも難しいよう(^|^; 後編は勿論、もっとずっとラブくなるのですが、出すのに相当迷いました(^|^; こんなもん出しちゃってもよいものだらうかと。

前半分はね、まあまだよかったと思うんだけど、後ろ半分はホント、私の必死さが伺えると思いますよ……;;

でも、出しました！ 出したんです。

ホントつまらないんじゃないかって不安なのですが、私なりに面白く努めたつもりです><

でも、それでもこの手のほのぼのらぶらぶは苦手なのよ。いつも大抵人の見て喜ぶだけで……><

なれないことなので、どうか暖かな目で見守って！

もう後編は一応出来てます。だから、これも投稿したわけだけど。

ああ、でも後編出したとき、読者が一人もいなかったらやだな、怖いな、落ち込むな……。

てなわけで、この前編で、いい反応が返ってきたならば後編も投稿しようかと思えますー><（小心者）
それでは、前編をお読みいただきましたお礼と、後編にてもお会いできる事を祈ってますv

08・8・3 朧月。

後編。

開けた玄関には、和葉と園子、そして二人の前に顔を赤らめながら立つ蘭の姿があった。恥ずかしげに口元を緩め、笑った蘭の両隣で、和葉と園子は間逆の反応を見せていた。

和葉の方は、心からの笑顔で「おめでとう」を告げた。嬉しそうなその顔は、先ほどの平次の態度を思い出させる。一方、園子はやけた顔で、片肘を突き出し、新一の胸元をどついてきた。

「まーさか奥手な新一君や蘭に後れを取るとはねーえ。どこまで言ったのさ、二人共」

園子の言葉に、声をかけられた新一よりも赤くなった蘭は俯いた。同じく頬を染めた新一は、蘭に一度だけ視線を送った後でそっぽを向いた。

「ば、バー口っ。どこまでもまだ行つてねーよ」

「嘘よー、私の情報網では、新一君と蘭はとづくにファーストキスを済ませてる！」

園子の爆弾発言に、蘭と新一、そして和葉は驚いて彼女を見つめた。

「なっ、何言ってるのよ園子!？」

「ほ、ほ、ホンマなん？ 蘭ちゃん」

「園子のでっちあげに決まってるだろーが！」

真っ赤になつて首を振り、否定する二人に、園子はわざとらしくニヤニヤ笑いを浮かべた。しかし、二人のあまりに奥手な反応に、

和葉だけは、不思議そうに首を捻る。

「別に、そない赤くなって否定しなくてもええやん。もうしてて当たり前前の関係やねんから」

「か、和葉ちゃん！」

蘭が苦笑しながら声を上げた。

新一は、溜息をつくなり頭を抱え込んだ。

「ま、いいからあがれよ。服部も来てるし、プチ前夜祭の準備も整えてきたんだろ？」

言うだけ言つて、和葉と園子を先に歩かせる。ちらりと蘭を見た新一は、真っ赤になった彼女の耳元まで姿勢を低く落とし、囁いた。

「彼女の言う事も、もっともだよなあ？ 蘭」

目を見開き、顔を上げた蘭のあごを、後ろを歩く二人に気づかれないように自分の元に引き上げ、彼はその首筋に自分の唇を小さく着地させた。

「ちょ、し、新！？」

「騒ぐな蘭。前の二人に気づかれたらまたからかわれるぜ」

りんごのように赤くなった彼女の顔に、新一は歯を見せて笑いかけた。蘭は視線を逸らすと

、なにやら小声でぶつぶつ呟きながら、新一の背を追った。

買って来た食事やジュースなどを机の上に広げて、彼らは人数分あるコップにジュースを装った。羽目を外しすぎて明日が台無しにならないように、それぞれに最終確認をした後で、平次が高々とコップを持ち上げた。

「ほな、工藤と姉ちゃんの結婚を祝おて……」
「乾杯！」

グラスがぶつかり合う音と共に、その場に居た全員の笑顔がまたはじけた。そう、新一と蘭は皆よりも一足早く夫婦になる。明日という日を持つて。

「らん、本当におめでとう。色々辛いことあったと思うけど……幸せに、なってるね」

「やだ園子。披露宴の前日に泣き出さないで。本番は明日なんだから」

「ええやん、蘭ちゃん。明日は園子ちゃん、式の役割で忙しいんやし、泣いてる暇なくなってしまうやろ？」

そう話す和葉に、蘭は深く頷いた。園子が、新一と蘭共通の友人代表スピーチを受け持つ事と決まったのは婚約してそうたたない頃だ。その後に、平次が新一の、和葉は蘭の、それぞれ個別の友人代表としてスピーチを受け持つことになった。

「けど、蘭ちゃんホンマにアタシもスピーチやってよかったん？
最初は、友人代表は平次と園子ちゃん……平次が友人代表やるん

やったらってアタシに氣い遣てくれたんとちゃうのん？」

「そんな事ないよ。園子は小さい時からずっと一緒に居た親友だけど、和葉ちゃんも大事な友達だし、新一が居ない間も帰ってきてからも、ちよっぴり似てる立場から沢山励まして背中押してくれたもの」

「そうよねえ、蘭。和葉ちゃんが服部君と付き合い始めたの聞いて、新一君の告白頷く決心できたんだもんねえ。全く、昔っから誰かに背中押されないと奥手なんだから」

「もーっ、園子!？」

やけにニヤニヤ笑いで絡んでくる園子に、蘭は再び顔を赤くして抗議した。

机には、次々と空き缶が転がった。オレンジ、リンゴ、炭酸飲料、清涼飲料水、ウーロン茶……実にバラエティに富んだ飲み物だが、そこに酒の類が全くないのは、本番万全の体調でいられるように、である。飲んだり食ったりする以外のレクリエーション的内容もまた、カードゲームなどの手軽な遊びだ。ちなみに、今彼女たちがやっているのは……

「私が王様ね」

引き抜いた紙に書かれた王の文字に、園子は嫌な感じにせせら笑う。悪戯を思案する子供のように、舌なめずりをしながら新一と蘭の顔を交互に眺めた。平次と和葉が引き抜いた番号を、こっそり尋ねて確認した彼女は、テンション高めな大声で言った。

「一番と三番の二人が、お互いの好きな所を皆の前でほめあう事！

……ちなみに、三つ以上ね」

「三番、って、私!？」

「一番オレじゃねーか……おい、園子！ 仕組んだな？」

園子の言葉に、三番と一番　当然だが、向き合うように座った蘭と新一　の二人はそろって声を上げた。園子は表情をまるで崩さずに、ただ面白そうに答える。

「あーら新一君。仕組んだなんて人聞き悪いわよ。この真っ赤になつてる蘭のいい所三つぐらい、すぐに思い浮かぶわよねえ？」

「ば、バー口。んなもん……」

「蘭だつて、いつも羨ましい位のろけ話聞かせてくるでしょ？」

「そ、園子の馬鹿！」

そう、彼らが今やっているのは、合コンなどいけば定番の、年齢選ばず王道と言つていいであろうゲーム　王様ゲームだ。やろうと言いつ出したのは、今まさに王様道まっしぐらの、彼女である。

とにもかくにも、小学校時代からの親友に、たじたじでいいように扱われている新一と蘭を、大阪の二人は呆けた顔で見つめていた。反論するだけの余地も与えない園子のからかい攻撃は、十年以上もこの二人を見てきたから成せる技なのだろう。

「ほらほら、早く言わないと……明日愛を誓い合ってくるんだから。その前に破局しちゃうわよん？」

言葉を詰まらせた新一と蘭の二人は、お互い顔を見合わせ、頬を染めて目をそらした。

「ら、蘭……お前先に」

「い、嫌よ！　新一が先に言つて。こういうのは男の子からでしょ？」

下唇をかみ締めて、真っ赤な顔を俯いて誤魔化す彼女の向かいで、新一はしばらく逡巡した。そして、目を泳がせながらも口を開く。

「蘭は、昔っから……その。馬鹿みてーに人懐っこいっつーか」

出だしの、多少余分な言葉のついた台詞に、俯いていた筈の蘭はピクリと上半身を振るわせた。眉が数センチほどつりあがったのは、彼女が俯いているせいで誰にも見えない。

「無駄に好奇心ばかりあるくせに、怖がりで涙もろくて、すぐわんわん泣きやがるんだよな。ったく、ありえねー程気が強くて、愚直でややこしくて、」

「……ちよつと、新一？」

重低音にとめられて、新一は視線を真正面に戻し、俯く蘭に視線を止めた。

低い声を出した蘭は、まだ俯いている為、四人にはプルプルと震えているようにしか見えない。が、彼女の体から湧き出る妖気のよくなオーラに、平次と和葉は顔を引きつらせて後ずさった。園子もまた、面白そうな顔をしたまま、数センチ蘭から遠ざかる。

「私の好きな所って言う話よね？ 確か」

「……ああ、そうだな」

やけに一字一句強調して確認する蘭に、新一は飄々とした態度で答えた。蘭は顔の前まで持ち上げた拳を震わせた。

「そのどこが、好きな所なのよー！」
「うおつと」

鋭い勢いで新一の顔面めがけて突き出された蘭の拳を、彼はどこか楽しそうに顔を斜め下に落とし、かわした。

更にしゃがんだ頭にひじを落として来ようとする蘭をちらりと見て、顔を逆方向に倒した。避けた先のテーブルが、凄じ破壊音を立てて割れ、崩れ落ちた様に、彼は頭を抱えた。結構長い付き合いだった机と、ため息ひとつの別れの挨拶を交わす。

「……な？　腕っ節任せのありえねー程気が強い女だろ」

長いため息の後に、同意を求めるように呟かれた新一の科白に、蘭は一瞬だけむっとした。だが、さすがに申し訳なさそうに手を引っ込めた。

新一以外の三人分の白い目を浴びながら、居心地が悪そうに縮こまり、しおらしく元の場所にへたり込んだ。

間髪いれずに、その頭に、先ほど割れた机の残骸　ニセンチ角ほどの木の破片が投げ当てられた。

「いたっ」

思わず声を上げ、文句を言いたげに顔を上げた彼女の視界は、頬を染めた新一のジト目とぶち当たる。

「最後まで聞けっつーんだよ、ったく。だから、その愚直で、気が強い割に泣き虫なおめーを見てると、つかまってやらずにいられなくなって、気がついたら危なっかしいおめーをいつも追ってたんだよ。三つとか四つとか、数の問題じゃねーんだよ。オレは蘭が蘭だから好きになったわけで。どこが好きかなんて、んなもん一つ一つかいつまんで言えるかバーロー」

ぶっきらぼうな口調と台詞が、照れ隠しなのだという事は顔を見

れば判る。

じつと、新一を見上げていた蘭は思い出していた。昔も、彼はそんなぶつきらばうな台詞をはいたものだ。髪を葉っぱだらけにして、擦り傷を不機嫌そうにさすりながら。

” おめー、あぶなっかしいんだよ。……だから、いつでもオレの目が届く場所にいろよ！ そしたら、”

過去の思い出に浸っていた蘭は、夢の中にもいるかのような感覚で、新一を見つめた。そこは、邪魔者も何もいない、二人だけの世界だ。

「盛り上がつてるとこ悪いねんけど、そろそろ先進んでくれへんか？」

二人だけの。

「ちよつと、平次邪魔したらアカンやんか！」

「そうよ、今せっかくいい所で、もうちよつとでちゅー……」

無粋な声が聞こえて来てしまった所で訂正しよう。

そこは、二人だけの世界に入り浸りたかった新一と蘭を、ある意味暖かく見守ってからかうネタを待っていた三人の同席した一室内だ。微かに呆れ顔の平次と対照的に、楽しそうな和葉や園子の二人を、新一と蘭はため息交じりに見つめた。

パーティーは、最後までどこかすつとぼけたゆるい調子で、夜早めに幕を閉じた。そして、蘭や和葉や園子は家に帰り、平次と新一はそのままそこで余韻に浸りながらも一夜を過ごした。

翌日もまた、青空は高く澄み渡っていた。そんな綺麗な日に結ばれる事を嬉しく思いながらも、白いベールをつけ、ふりふりの豪華なウェディングドレスを着た蘭は、バージンロードを歩いていた。頬を染めながら、先に見つめる先には新一がいる。これからは”幼馴染”でも”恋人”でもなく、夫婦になるのだと考えると、心が躍った。

そろった主役二人は仲睦まじく寄り添いあい、お互い見つめあった。友人代表スピーチには、たまに飛び出す（本人たちには）恥ずかしい笑いネタに、二人で顔を見合わせ苦笑しながら聞いていた。誓いの言葉も、ケーキ入刀も指輪交換も滞りなく済ませ、集められた大勢の仲間たちに見守られながら、暖かな時間を二人は過ごした。

そして。

「それでは、最後に誓いのキスを」

この、瞬間も。持ち上げられたベールに、鼓動が最高潮にまで早まる蘭を落ち着かせるように新一は誰にも聞こえない囁きをこぼした。

「色々あったけど、ようやく昔の約束が果たせて、ほっとしてるよ」「え?」

きょとんと顔を上げた蘭の唇に、吸い付くように彼は自身の唇を重ねた。熱い思いが、同調して二人の中にとけてゆく。唇から繋がって一つになった二人は、そのまま五秒、十秒、二十秒と、数えるのも野暮なほど長い時間を止めた。

離れ離れになっていた間、苦労もあつたけれど、それ以上に。これからの未来は、こうして二人は一番近くで触れ合いながら、幸せを手にしてゆくのだ。

それは、もうずっと幼い頃から交わされ、決められていた約束だから。

”いつでもオレの目が届く場所にいろよ！ そしたら、あのきれいなドレス着せてやるし、世界一幸せな、はなよめさんにしてやるからよ。”

離れかけた新一の唇との別れを惜しむように、蘭はもう一度だけ彼を引き寄せ、その口に軽くて甘いキスをした。

X X X 完 X X X

後編 (後書き)

はい、こんばんはー(^^)

・・・・・・(――;) はうっ。

なんか、前半思わぬ好評頂いたから出してみる決意したのはいいんだけど。

皆がしらけてさーつと後ろに引いてく音が聞こえる気がするよ>><ため息が聞こえる気がするよ>><

ホント、らぶらぶ恋愛ものって苦手なんだよなあ、と実感します。

ちゅーばかりが強調されたラストの結婚式(^^―^^;

でもさあ、小説で”結婚式”の内容書くときって、ぶっちゃけバー

ジロードとちゅー以外どうでもよくね？(待て

あと何？ ブーケ？・・・誰に受け取らせろってのさ。

私は、どうでもいいです、他のどんな儀式も。

誓いの言葉とか、指輪交換とかはまだ重要な儀式かも知ないけど、どの道同じ事しかないじゃん。

大人数を操るのはやっぱり難しかったというのが正直な感想の今回のお話。

それでも、なんとからぶらぶっぷりはしっかり伝えられてるといいな！。

結婚式前日とは思えないような、奥手な二人にしか出せない照れぶりとか。

ちなみに、ラストのラスト、ちよっぴり工夫を凝らしてみたのですが、多分誰も気づかない・・・(笑)万に一つもこれの事じゃないの？って方居たら是非教えてーvvそんな方居たら凄すぎる！

もし、もしも期待はずれなんて事ないよーと思われちゃたら、とても幸いですvv

反応いつでもカモオンバーベです（笑）　というか、不安を払拭したいだけかも。

いえ純粹に、次回・・・そして連載の力にさせていただきます

それでは、前後編という割に長いものになってしまいましたが、最後までお付き合いありがとうございましたーvv

両方とも見捨てず読んで下さったあなたに感謝の抱擁をつ（要らんわ！

次回作や連載の方も、是非よろしくお願い致しますーv

・・・余談ですが、連載楽しみにして下さってる方へv

日曜更新の法則崩れが起きてるのでお知らせします。

Meetsは、もしかしたら今日深夜中、または明日零時過ぎに更新できるかも知れません。

それ夢は、次話出来次第あげるつもりですので、完成時の曜日によつて、平日アップもあるかも知れません。

どうぞ、そちらもお楽しみくださいませv

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7807e/>

Eternal Love

2010年10月10日10時54分発行